

女性教職員活躍推進だより

第4号 令和5年2月3日 教育庁職員課

☆☆ 女性管理職ロールモデル紹介 ☆☆
南相馬市立原町第二中学校長

和田 節子 さん

職員課主幹兼副課長
高橋敏幸が話を伺いました！！

Q:これまでの経歴を教えてください。

東京都で中学校教諭として5年間勤務後、福島県の中学校教員に採用されました。その間、研修主任や進路指導主事、教務主任等、様々な経験をさせていただきました。また、ドイツのフランクフルト日本人国際学校に3年間勤務し、日本各地から集まる教職員とともに教育活動を進めることができたことも大きな財産になりました。

その後は、中学校で教頭として2年間勤務し、相双教育事務所の指導主事として3年4か月間指導業務に携わりました。校長として学校現場に戻ってからは、小学校と中学校で通算11年8か月勤務しました。小学校長時代においては、東日本大震災に伴い避難していた複数の小学校を兼務するという経験もしました。

Q:教頭昇任試験を受けるきっかけは？

研修主任として、教育センターでの研修や自校の研究公開等を通して、校内での研究の方法について見識を深めたり、教務主任として指導要領を熟読し、文献等で勉強しながら教育課程を編成したりする中で、教育活動の可能性が広がり、いろいろなことにチャレンジしたいと思うようになりました。

様々な経験の中で、管理職はクリエイティブで面白い仕事であると思うようになったことがきっかけです。



Q:家庭の協力はどうでしたか？

夫も管理職であるため、家族の理解はありました。

また、私が管理職に昇任したことがきっかけではないのですが、あるときから夫が料理に目覚め、今では料理はすべて行ってってくれています。義務感ではなく、楽しんで作ってくれているようで、カレーもルウから作っているようです。(笑)



Q:教頭のやりがいは？

教頭は、教諭とは全く異なり、行政の視点から幅広く教育を俯瞰することができます。子どもたちへの教育の基盤を支えるのが教頭です。子どもたちをはじめ、保護者、地域、教職員、校長と幅広く関わりを持ち、その方々を支援していくのが面白く、新鮮な経験でもありました。

また、問題が発生したときには、管理職として最前線に立って対応しなければならないこともあるため、勇気が必要ですが、達成感があり、やりがいを感じることもできました。

Q:逆に大変だったことは？

校長が変われば、学校の教育方針も変わります。その都度、校長の教育理念と教職員の考えとのギャップを埋めるには、時間と労力が必要であり、教頭として柔軟性を持って対応することができなければ、教職員を導くことはできず、校長のビジョンを実現することはできません。この舵取りが大変でした。

Q:校長としてのやりがいは？

学校の運営ビジョンを設定し、組織として動き、目標に向かって教職員が一丸となって取り組んでいくプロセスを楽しんでいます。もちろん、軌道に乗るまでは苦労も多く大変ですが、先生方がしっかり子どもたちを指導し、その指導が確実に伝わり、ビジョンが浸透してきていると実感できたときは、至福の喜びです。

Q:最後に、女性教職員の皆さんにひとこと。

先生方にはたくさんの可能性がありますが、人それぞれに事情があり、可能性を生かしきれていないこともあります。児童生徒が悩んでいるとき、先生なら「やっごらん」と背中を押すはずです。様々なリーダー像がありますので、自分らしく、自分なりのスタイルで管理職ができるはず。その能力を是非管理職として発揮してほしいと思います。

和田節子さん、

貴重なお話、大変ありがとうございました！

次回の女性教職員活躍推進だよりの発行は、次年度の5月を予定しています。

令和5年度も、福島県で働く女性教職員の活躍を伝えていきたいと思います。

よろしくお願いします。



～女性教職員活躍推進だよりの発行に当たって～

福島県教育委員会は、女性が職場においてその力を発揮できるよう、「女性教職員活躍推進プラン」を策定し、教職員のニーズに即した女性活躍のための対策を計画的に推進します。また、男女共同参画の実現に向けて、人事の公平性・公正性を確保しつつ、女性教職員の管理職への登用に努めることで、令和7年度までに、女性管理職の割合を教頭・副校長で15%、校長で13%とすることを目標としています。